

学会ニュース

目次

・ 第32回大会について	1
・ 2011年グラーツ大会での日韓共同セッションについて	長尾伸一	2
【エッセー】		
・ 江戸の雨	青木孝夫	4
・ 安藤隆穂会員と私	中矢俊博	7
・ ゴッティ・フォン・ラ・ロッシュとヨハンナ・ショーペンハウアー — 結婚：現実と虚構 —	宮本絢子	9
・ 事務局より	11

第32回大会および第33回大会について

今年度の第32回大会は、2010年6月26日（土）、27日（日）に新潟大学で開かれました。開催校責任者は逸見龍生会員でした。

5名の会員が自由論題で発表され、共通論題「趣=味」（コーディネーターは安西信一会員）ではほかに4名の方がご報告くださいました。今回はレクチャー・コンサートの代わりに、逸見会員のご尽力により、新潟を舞台とした江戸期古浄瑠璃（越後猿八座による「越後國 柏崎 弘知法印御伝記」が上演されました。また、懇親会では18世紀の日本料理の再現も行われ、大変多彩な内容で盛会のうちに終わりました。

来年度の第33回大会は、2011年6月18日（土）、19日（日）に立教大学で開かれる予定です。開催校責任者は坂倉裕治会員です。詳細は、次号の学会ニュースでお知らせいたします。

国際大会での日韓共同セッションについて

長尾伸一（名古屋大学）

来年7月にグラーツで国際18世紀学会の大会が開かれる。日本18世紀学会では韓国18世紀学会と共同して、「東アジアと啓蒙」をテーマに、二度の共同セッションを開催してきた。来年の国際大会でも、日韓18世紀学会の共同セッション（グラーツ大会では「セクション」と呼んでいる）を開くことが合意され、現在準備を進めている。

各方面からの参加を容易にするためにテーマを包括的なままにとどめておいた前回、前々回と違って、今回の共同セクションはやや内容を絞り、「18世紀における公共知の東西比較（Public knowledge in the East and the West: comparative perspective）」というテーマとした。長さとしては90分の連続二回分、180分のセクションとして登録した。

近年西欧を対象に、18世紀ヨーロッパでの「公共圏」の発展が研究されてきた。今回のテーマでは、この18世紀における政治的な公共性の誕生を念頭に置きつつ、「公共的な知」をよりひろくとらえている。それにはたとえば百科全書的なプロジェクトや出版、学術的諸団体の形成に見られる科学的な知の公共性の形成、知の媒体である文体、レトリック、言説圏の発展と変化、さまざまな知を支える制度的、ネットワーク的文脈なども、広い意味での知や知の媒体の「公共性」の生成と見る。そしてこれらを、18世紀の西洋とアジアで同時代的にとらえることを目指している。とくに政治的な意味での「公共圏」を議論することが難しい18世紀東アジアを同時代ヨーロッパの比較対象とするためには、政治的知に限定されない、さまざまな知と知の媒体の「公的」性格をとりあげることが重要である。

以上のような一応の大枠を定めたうえで、本セクションでは日韓両学会の会員から、ヨーロッパ、東アジア、あるいは両者に関する報告を受けて討論を行い、以前の2回よりもさらに凝集性のある内容作りに努めていく。詳細については、この秋11月の韓国学会大会をめぐりに打ち合わせる予定となっている。大会実行委員会によれば報告は15分程度ということなので、人数は日韓あわせて8-10人程度になる見込みである。グラーツ大会の公用語は英仏独だが、コミュニケーションの円滑化のために、報告言語は英語がのぞましい。討論は両学会の司会者を介して、英仏日韓などの多言語で行うことになるだろう。とくに日韓中を研究している会員の皆さんの参加を期待したい。

なお韓国学会は共同セクションとともに独自企画として、時間観念の東西比較をテーマにした、以下の90分のセクションを準備している。日本からの参加も歓迎されている。こうしてグラーツ大会では、少なくとも2個の東西比較セッションが開催されることになる。

韓国学会セッション

タイトル : In and Out of Time, East and West

概要 :

This panel will examine how modern, secular and linear ideas of time intersect and/or contravene more traditional notions of *kairos*, carnival, or fullness of time in both East and West in the eighteenth century. Enlightenment thought is often rooted in religious discourse, but the growth of scientific knowledge and technological advancement, new cultural conceptions of time and history, were bound to lead to new experimentation and experience of time. Even within one culture, there can be many different experiences of time and hence several "times," for instance public time, farming time, female time, apprentice time, factory time, carnival time, school time, and even narrative time. Newer modes of mechanical time were to impact literary genres such as the novel. In a very famous instance of the new realism, Samuel Richardson has his heroine Pamela mark her journal entries by the hour as well as day to signal the closeness of her moment-to-moment narration of thoughts and feelings. At the same time, narratives permit an escape from chronometric time and hence many literary genres including the novel seek to recapture a higher time that exceeds the homogenous, profane time of modernity. Benedict Anderson has articulated how modern ideas such as the "nation" or the "people" have become possible only within the parameters of a purely secular time. In an imagined community of simultaneous happenings shared by a group who share the same language and print culture, it becomes possible to imagine a radical horizontality that Charles Taylor has termed the "direct access society, where each member is 'immediate to the whole.'" Thus culturally new apprehensions of time engender new forms of political subjectivity as well as social exchange. Ancien regime ideologies privilege a more "vertical" notion of society in which the figure of the king functions as the apex of a hierarchical and God-given order rooted in a higher time. Our panel will bring together papers that examine differing cultural notions of time both in the East and West that illuminate our understanding of the eighteenth century.

江戸の雨

青木孝夫(広島大学)

雨の藝術的表現また雨の美的な体験を取り上げて、日本の美学に関する研究発表を試みたことがある。その際に得た見通しの一つは、夜雨の味わいに代表される雨による包まれ感或いは繭玉感とでも言うべき美的体験の様式から雨景の視覚的な把握という展望的な美的体験への展開・転回が18世紀を中心に起きたらしいことである。このことは、雨を越えて、(とりわけ自然に関する)美的経験の代表的様式の変容・転回が近世に進んだことを示している。

17世紀のモリエールの『人間嫌い』を見ると、アルセストという主人公にとり世界は嘘のつけない法廷のような真面目な場所でもあれば、彼の友人フィラントにとっては外交や社交のように適度な嘘の必要な宮廷でもあったろう。日本でも長いこと文化が熟成し、人間関係への配慮は社交辞令としても種々に発達し、その結果、京都の「ぶぶ漬け」の如き伝説も誕生したのだらう。しかし、むしろ注目すべきは、和歌や連歌や俳諧を介して風雅の「本意」が美的虚構として浸透していたことではないだろうか。

「哥道に本意と申事御座候 たとへは 春も大風吹 大雨ふるゝ事も御入候へとも 春雨も春風もものしつかなるやうに仕る事 本意にて御座候」(『連歌至宝抄』)

春の風雨に関する罪のない嘘である。しかし、この〈嘘〉の勧めによって、雨が自然的気象ではなく、文化的美的な事象として了解されるべきことは明らかだろう。里村紹巴の『連歌至宝抄』(1627年刊)は芭蕉やその門人・後進らが参考にした風雅のカタログないしマニュアル本である。和歌の本意という美的な本質を一層緊密に季節の循環と結びつけて、俳諧の季語へと接続・展開させていくのに連歌は寄与したが、『至宝抄』はその集大成と目すべき著作である。

今日、風雅を藝術と結びつけるステレオ・タイプの藝術観は成立しにくいだろうが、それでもなお風雅は藝術を構成する重要な契機の一つとして存在し続けている。ただし、江戸の「藝術」は、今日の藝術と緩やかに連続しつつも異なり、風流や風雅とはむしろ対立する概念であった。例えば、仕官の道を諦め、俳句の一筋に連なった芭蕉の場合、彼が放擲した仕官の道が藝術と関わり、一筋と縋った俳句は風雅に繋がっていた(『笈の小文』)。

芭蕉は『奥の細道』(1694年)に代表される紀行文学を残すことになる旅を五度企てたが、その最初の『野ざらし紀行』(貞享元年、1684年)には、箱根の「関越ゆる日は雨降て、山皆雲に隠れたり。」の文に続き、次の句が掲出されている。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

富士を望む箱根の関は、宗祇が旅の途上で亡くなった(1502年)地である。後年(1686年、『笠の記』)、芭蕉手製の笠を巡り、「世にふるも更に宗祇のやとり哉」が詠まれたが、宗祇の世に降るもさらに時雨の宿りかなを踏まえていることは言うまでもない。芭蕉は、宗祇と共に人生を旅と観じ、その旅の人生を時雨の宿りに譬え、宗祇に加え西行や蘇軾らと同行のつもりであった。

『野ざらし紀行』には芭蕉自筆の画入りの版がある。それを参照すると、この場面の図には、見えない筈の富士山も描かれている。雨や霧という障碍を介して、目に見えない筈の富士、心に浮かんだ富士の姿が描かれている。図では、霧も富士山も共に朦朧とし、その朦朧の世界は雨中の山道を歩く感覚にも似ている。そこには、雨や霧に包まれて歩く不思議な楽しさも含まれてよい。さて掲出句。雨の箱根を行く芭蕉がせっかくの機会に期待していた富士を見ることができないにも拘らず、この状況に身を置くことを「おもしろき」と楽しんでいるのはなぜだろうか。「対雨恋月」の伝統を踏まえ不在や不可視の花や月の登場を待つことにも喜びを見出す和歌的感性が関与しているかもしれない。加えて先に述べた宗祇を甫めとする先人への思いが決定的である。芭蕉が「おもしろき」と言うのは、西行や宗祇や雪舟や利休や蘇東坡に自己を重ね合わせて、風雅の伝統、隠者の伝統への帰属の念を雨中で更めて反芻する思念自体を楽しんでいたことを意味する。霧に隔てられるが故に想われる富士は、あたかも時を隔てて会えない隠者の如くだが、心の世界では両者は却って親しいのである。

この点、およそ150年後、広重の「東都名所・日本橋の白雨」(1834年頃)に描かれている雨中の富士山は異なる。雨や霧という障碍を介して、目に見えない筈の富士を描いた点、両者はたしかに似ている。しかし、広重の雨景の図自体、前景に日本橋、中景に土蔵が軒を連ね、遠景に朧に霞む富士が描かれている、というように見事な構図と眺望を備えている。広重は、手慣れた遠近法によって構成される明瞭な眺望の視覚的世界に雨の描写を導入し、斜線の雨の彼方に富士のシルエットを浮かばせる。このように雨が一種の簾ないし半透明のスクリーン効果を発揮する景観は、たしかに晴天の明快な見通しとは異なるが、しかしやはり見事な絵画的展望を示す。広重は、その視覚的眺望表現の点で芭蕉の図とは全く異なるのである。しかし、その絵画表現以上に、見えざる富士を楽しむ美的精神に於いて両者は異なる。芭蕉は、霧雨の齎した雰囲気の中、繭玉のように風雅の伝統に浸っており、広重は日本橋と富士の取り合わせに雨を加えて絶妙の描写を示しているからである。

以上の僅か二例に固執するつもりはない。象潟や雨に西施がねぶのはな にしても、五月雨を集めて早し最上川 にしても、眼前の雨の状景を視覚的にも捉えていることはたしかである。前者はなるほど朦朧的ではある。それでもやはり、芭蕉と広重の雨の把握は、くっきりと異なるのである。

和歌や連歌の世界の中で見出され、季節に配当され、その美的把握が磨かれた雨の個性的様態が浮世絵でも描かれる。曰く、春雨、五月雨、村雨、時雨、白雨、夕立等々。これらはいずれも『連歌至宝抄』を經由して、江戸時代の俳諧で「季の詞」の一環として洗練されてきたものであるが、文学が春と秋の雨を偏愛してきたのに対し、浮世絵は夏の雨を描いてさわやかである。もとより水墨画は広重の眺望とは全く異なるのであるが、それは別にして、瀟湘八景を含め、白雨を描く水墨画は殆どないのではないか。

少々単純化が過ぎようが、両者をやはり典型として心に留めておいてよいだろう。この両者に挟まれた18世紀、雨は藝術の世界にどのように降ったのだろうか。この点、藝術としては文学の中でも俳句が、絵画の中でも浮世絵が問題になる。それらの中で描かれた雨は、実に多様に互るが、このエッセイの限りでは全く言及できない。

蛇足めくが楽という概念から雨の享受というより自然美また気象の美を思想の構図の中に取り込むことになった二人の思想家にごく簡単に触れておこう。

一人は貝原益軒（1630－1714）である。彼の思想の中心には＜楽＞の概念がある。「人と生るゝは、きはめてかたき事なれば、わくらはに得がたき人の身を得たることをたのしみて、忘るべからず。」（『大和俗訓』）と、天より生を享けたことを感謝し境遇を生き切ることを楽しむべきとし、ことに晩年、大いに「楽」を説く。そこでは、天からの恵与の身を活用し、益や善を実践して楽しむだけでなく、また自然享受にも美的経験の喜悅や感動を認め、これを「楽」として推奨している。

近世前期の大儒でもある益軒は「人の世にある事、假にやどれる旅人のごとし。」と芭蕉と同じ無常の認識に立つが、風雅に溺れるごときは「無用の事」と排していた。彼の教養からしても、自然の美しさは、和歌や連歌の伝統によってのみ彩られ発見されるものではなかったが、その自然美には「風雨」も含まれる。「霞たつより雪の積れるまで、其けしき、をりをりに異なり又朝夕のけしき日々に異なる、変態きはまりなき眺也。天にありて象をなせるは、日月の輝き、風雨のうるほひ、霜雪の清らかなる、雲煙のたなびけるは、天の文なり。」（『楽訓』）ここでの「けしき」は殆ど四季の気象の変化、天気の色としての＜気色＞である。天象や天文の「変態きはまり眺」めの一として「風雨のうるほひ」を推奨する感性は、和歌の伝統とは異なる。「天地の内、四時の行はれ、百物のなれる有様、目のまへにみちみちて、人の見る事を喜ばしめ、心を感じしむる事、大なる楽なるかな。」晴雨を越えて天気に感謝する感性、それが雨を含む気象の変化である「けしき」を見て感じる喜びを肯定させている。ここには天地の道の発露たる自然の美しさの賞賛と自然を前にして反応する喜悅と快樂の肯定がある。この思想は、益軒をして風月の嘆賞を「清福」と捉えさせているのであるが、管見の限り、雨景の美的享受について具体的には述べていないようである。

同じく＜楽＞を説いた思想家に宣長がいる。彼が私人である自己の趣味と興味に立脚し、思想を展開したことを示す周知のテキスト（「上柳敬基宛書簡」）に拠って一言述べよう。彼が「天地万物、皆な吾が賞楽の具なるのみ」と語る時、宣長の個人的な「好・信・楽」の対象として「儒墨老莊諸子百家」の偉大な思想も「燕遊」も、そして「風雲雨雪」の気象も皆、無差別に「賞楽の具」として扱われる。雲も雨も、風雅の伝統よりは、万物享受の一環なのである。「宇宙の有る所、適くとして好み信じ楽しまざるは無し」という姿勢には、もとより所謂藝術という文化領域の特権化は存しない。これは美的な対象として見る限りでも、対象の途方もなく広範な拡大であり、趣味と享楽の相関者に儒学をはじめとする諸思想を挙げる姿勢は、和歌的風雅の姿勢を遥かに越え出ている。

しかしながら、この思想的構図の故に、宣長が雨の魅力に関して興味を示したか、或いは俳句や浮世絵の世界に対して、実際、いかなる姿勢を取り、また洞察を示したかはまた別の問題である。この点に関連し、「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。」と述べた『徒然草』に対する宣長の批判については、是非にも論ずべきであろうが、本エッセイの限り、18世紀の雨同様、隠れて見えないままに終わることを許されたい。

安藤隆穂会員と私

中矢俊博（南山大学）

事務局をお世話いただいている増田真さんから、「学会ニュース」に掲載する原稿の依頼を受けた。私は、会員の皆さんがどのようなことを書いているのかを知るために、以前の「学会ニュース」を探してみた。色々と苦労して探してみたのだが、第43号(2003年10月)と46号(2004年10月)の二冊しか出てこなかった。私には変な整理癖があり、読んだ資料はさっさと処分してしまう。ところが幸いなことに、それらの冊子には、名古屋大学の安藤さんが書かれた代表幹事退任の弁と、私が安藤さんに頼まれて開催した、日本18世紀学会第26回大会(於:南山大学)の事が記されていた。以下では、これらの冊子を材料に筆を進めていくことにする。

私がいつ頃、この美学サロンの(?)な学会に入会したのか覚えていない。私は経済学史を専攻しており、18世紀に活躍した人はもちろんのこと、現代までの経済学の歴史を研究対象としている。最近はその中でも、「20世紀最大の経済学者」と言われているケインズの文化・芸術面での活動に関心を持ち、拙著『ケインズとケンブリッジ芸術劇場』(2008年)にまとめたところである。また、そのケインズが「ケンブリッジで最初の経済学者(教授)」として、マルサス(1766-1834)を高く評価していることから、ジーザス・カレッジ出身の彼に関する研究も同時に進めている。そのこともあってか、安藤さんは私にこの学会に入るよう勧めたものと思われる。彼は、ルソーやコンドルセと言ったフランス啓蒙主義の研究者であって、この分野で、彼が日本での第一人者であることを疑う人は誰もいない。彼の飄々とした態度からは想像もつかなかったが、『フランス自由主義の成立』(2007年)という立派な書物の出版により、昨年名誉ある日本学士院賞を受賞された。最も驚いたのは、彼自身だったかもしれない。

ところで、マルサスの父ダニエルは、オックスフォード出身の熱烈な啓蒙主義者であって、息子ロバートにはしっかりとルソー流の教育を授けたようである。ロバートが生まれて数週間後に、ルソーがヒュームとともにダニエルの住まい(ルッカリ)を訪ね、彼に祝福を与えたことは有名な話である。息子ロバートは、啓蒙主義者である父ダニエルとの論争を通じて、自説を形成していった。彼の有名な『人口論』(1798年)には、最初にそのあたりの事が書かれていて面白い。しかし、ロバートは、父の思いとは異なり、現実を重視した偉大な経済学者となった。ケインズも、有名な『マルサス伝』(1933年)に付け加えられた「100年祭記念講演」の中で、「マルサスは深遠な経済的直感と、経験という移り変わるものに対して偏見のない心を保ちつつ、しかも絶えずその解釈に形式的思考の原理を適用するという、類まれな資質の持ち主であった」と、ロバート・マルサスのことを絶賛したのである。

さて、「学会ニュース」第43号(2003年10月)にある安藤さんの「代表幹事を終えて」を拝見すると、彼は2003年の3月末をもって、2期4年の大役を終えたようである。私が安藤さんから南山大学大会開催の依頼を受けたのは、もちろん1年以上前のことだから、彼はちゃんと学会開催校の段取りをつけてから、退任したことになる。学術会議への登録、日韓交流の進行、レフリー論文の掲載、ホームページの開設などはまさしく、彼を中心とした学会の功績あると同時に、次期開催校への根回しも彼の仕事であった。

実は、安藤さんの代表幹事時代は、私の多難な学部長時代と重なる。私も、1年後の2004年の3月末をもって、2期4年に渡る学部長の仕事を終えた。私の任務も、大学院改革などと重なったこともあり、安藤さんと同じように大変であった。それでも、2002年7月6日には、学部の開設40周年記念事業で、ショパンのピアノ協奏曲「第一番」ホ短調を指揮することが出来た。私は、大学時代にオーケストラの指揮者をやっていたこともあり、記念オーケストラを作って演奏することになったのである。安藤さんは、私の大学にも非常勤講師として来ていただいているので、開設40周年記念事業に参加されたかどうかは分からないが、私が指揮をしたことは知っていたものと思われる。そこで、日本18世紀学会の南山大学大会(2004年6月12日、13日)でも、私がオーケストラを編成して、皆さんに披露することを望まれた。

もう一冊の「学会ニュース」第46号(2004年10月)には、「第26回大会および第27回大会について」と題して、次のような文章が掲載されていた。「今年度の第26回大会が6月12日(土)、13日(日)に、南山大学(名古屋)で開かれました。開催校責任者は、中矢俊博会員でした。105名の参加者を得て、盛会の内に終わりました。今回は7名の会員が自由論題で発表され、また共通論題「奢侈論について」(コーディネーター:森村敏己会員)は4名の会員がご報告くださり、例年以上の多彩な顔ぶれとなりました。……」

この記事を読んで、私は少しばかり感慨にふけた。「そうか、105人もの方が南山に来られて議論を繰り広げられたのか。7名の発表者には、当日十分に力を発揮してもらえたであろうか。そういえば、ヘンデルの発表者がおられて、突然ラジカセが必要だと言われたので、私が持っている少し大きめのラジカセをお貸しした。発表の後の質疑応答では、私が依頼した学生諸君がマイクを持って喜々として教室を飛び回っていた。そうそう、事前に用意した弁当の数が足りなかったり、飲み物の手配などで少しばかり苦労した。隣の場所にあった学食で懇親会を開催したところ、たくさんの方が参加して下さりよかった。その際に、当学会の会員である浜名優美副学長にも挨拶をしてもらった。2日目の最終に当る共通論題「奢侈論について」まで、多くの会員が熱心に聞いていた。……」

日本18世紀学会の特色である出し物(ミニコンサート)は、色々と考えた末に、ソプラノとピアノのデュオということにした。安藤さんには悪かったが、学部の開設40周年記念事業で、学部長として挨拶や、講師の接待(マルクス学長と葛西JR社長)、オーケストラの指揮、懇親会での進行と色々大変だったことを思い出し、今回は開催校責任者として黒子(裏方)に徹しようと考えたからである。それでも、ソプラノとピアノのデュオの際には、司会者として、演奏の合間を縫って、曲目(ヘンデルやモーツァルトの名曲)解説を兼ねて私が色々とお話をさせていただいた。後から聞いた話では、この解説は演奏者にとっても、また演奏を聞かれる聴衆の皆さんにとっても、評判が良かったようである。ソプラノは息を整える時間の確保に、聴衆は曲目の内容理解に役立ったと言っておられた。二人ともプロの演奏家(ソプラノは日笠美恵さん、ピアノは阪本牧子さん)であったので、質の高いコンサートが実現した。反省としては、私がモーツァルトとサリエリの話をしすぎたことぐらいであろうか。

安藤さんには、先ほども述べたが、私の大学に非常勤で、「経済思想史」と「経済倫理学」を教えて頂いているし、何十年か前には、学部のゼミの「交換討論会」(南山大学中矢ゼミと名古屋大学安藤ゼミ)で、学生どうしの交流にも協力して頂いた。その時は確か、ルソーの『社会契約論』を題材に交換討論をしたように記憶している。昨年、第99回日本学士院賞を受賞された際に、安藤さんは授賞式に着ていくモーニングのことや、陛下の前での振舞について心配されていた。私

はそれを聞いて、どこか安心すると同時に、可笑しくて吹き出しそうになったことを記憶している。音楽が大好きな私は、安藤さんと今後も親交を続けていくであろうが、難しい啓蒙思想家としてのルソーではなく、楽しい音楽家としてのルソーについて、お話を伺うことが出来たらと思っている。

ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュとヨハンナ・ショーペンハウアー

— 結婚：現実と虚構 —

宮本絢子（日本女子大学）

18世紀は啓蒙の時代と言われ、初期啓蒙においては、女性にも理性の光を！ という動きが起こる。しかしイギリスにはじまった産業革命の影響下、社会が大きく変化していく過程で、光はあっという間に消えた。18世紀後半、教養市民層の女性たちは、結婚してよき妻、よき母となり、家政を取り仕切れるように、手仕事をはじめとして、音楽、絵画、語学など実にさまざまなことを身につけた。しかしそれを職業にするなど考えもせず、ただ結婚のために。そこに矛盾を感じなかったのであろうか。

ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュ（1730-1806）は、周知のように、1771年にドイツ語圏で女性の手になる初めての書簡体小説『シュテルンハイム嬢の物語』を書き、一躍有名になった。またこの作品は、当初、ヴィーラント編として出版された。アウクスブルク大学医学部長を務めた父をもつゾフィーとヴィーラントは、親戚同士で、若い頃、一時婚約したこともあったが、彼がスイスのポドマーのもとへ行って、疎遠になり、婚約は解消され、その直後1753年に彼女は、父親の決めた十歳年上のラ・ロッシュと結婚した。

夫は結婚当時、マインツ選帝侯の宮内大臣シュタディオン伯爵の秘書を務め、また伯爵亡き後、妻の小説発表とほとんど時を同じくしてトリアー選帝侯に仕え、後には枢密顧問官議長に上り、貴族にも列せられるほどであった。一方、彼女も有名になり、コブレンツ対岸のエーレンブライトシュタインの館で、ゲーテも通ったドイツ初の文学サロンを開いた。

さらに夫が1781年に政争に巻き込まれて失脚し、その後年金も付かず、定職も求めなかったとき、まだ勉学中の下の子二人を養うために、彼女は1783年から2年間、これもドイツ語圏で女性主幹の初めての雑誌「ポモナ、ドイツの婦女子のために」を発行するなど、文筆によって生計を維持した。また自費ではなかったが、1784年から1786年まで、毎年外国旅行（スイス、フランス、オランダ・イギリス）に出かけ、それぞれ旅日記を出版する。傍からみれば、彼女は当時としては非常に自立した道を歩んでいると言えよう。

ところが夫が卒中発作を起こした後、1788年11月23日に亡くなると、翌日、エリーゼ・ツュー・ゾルムス・ラウバッハ伯爵夫人宛てに、夫の訃報を次のように記した。「神はわたしの愛する大切な夫を、そして少なからずわたしの魂をも、えもいわれぬ苦しみから解放なさいました。まだ今後数日間は、さまざまな用事に忙殺されますが、今、わたしは多くの犠牲を払ってやっと手に

入れたこの自由を、残りの人生をすばらしいものにするために使えるのです。」これは結婚してから35年目になる、彼女が57歳のときのことだった。

「やっと手に入れたこの自由」という、他の書簡にも見られる言葉に、一種驚きを覚えた。彼女はドイツ語圏における初めての女性職業作家であり、教養市民層の女性たちを教え導くと言う自負心にも溢れ、外国旅行の際には、かの地の有名人と語らうほどその名は外国まで聞こえていた。

しかし家庭内において決定権は、収入がなくても夫にある。オランダ・イギリス旅行からシュパイアーに戻ってみると、留守中に、夫が、長女の家近く、オッフエンバッハへの転居を決め、すでに移ったと知らされる。それに関して、マインツ選帝侯図書館員J. v. ミュラー宛、1786年12月9日付書簡に次のように記した。「わたしは嫌々ながらも明日早朝、ここ、落ち着いた静かなシュパイアーを発ちます。色々得ることの多かった人々との付き合いやホーエンフェルト男爵の選りすぐりの図書、これらすべてを後に残して。もっとも大事だと考えていたすべてを失うことになります。でも義務に従わなければなりません。」

彼女の作品の女性主人公はほとんどみな、決められた結婚から逃れようとする者はいない。たとえ相手が、意に沿わない人物であっても尽くそうとするか、または代償行為として、恵まれない者たちの生活向上に励む。ラ・ロッシュの旧姓はグーターマンだが、興味深いのは、その女性主人公を助ける、または主人公が模範とする女性の名前が、たとえばグッデンというように、作者自身を思わせる同じ頭文字Gで始まっていることである。

ラ・ロッシュは、当時の結婚制度に満足していなかったとしても、しかしそれに抗う意志はない。長女マクセは、若きゲーテも恋心を抱いた女性だが、婚約を破棄され、醜聞を恐れた親が急遽探してきたフランクフルトの豪商、寡夫で子持ちのP. A. ブレンターノと18歳で結婚させられる。20年間の結婚生活で後のロマン派作家クレメンスやベッティーナも含め、12人の子どもが生まれるが、12番目の子どもを産んだ際に、その子ともども亡くなる。

また次女ルルは、地位とお金のあるトリアー選帝侯枢密顧問官J. C. モーンと20歳で結婚した。彼の酒乱は周知のことで、周りの者はこの結婚を訝しがった。結局モーンの酒乱のため、ルルは何度も実家に逃げ帰ったが、最終的に離婚し、父母の最期を看取った。

一方、ヨハンナ・ショーペンハウアー（1766-1838）は、ラ・ロッシュより一世代遅く、富裕な商人の子としてハンザ自由都市ダンツィヒ（現グダンスク〔ポ〕）に生まれた。哲学者アルトゥールと作家アデーレの母で、自身も作家であり、ヴァイマルでゲーテも常連客だったサロンを開いたことでも知られている。彼女はやはり親の決めた相手と20歳年上の豪商H. F. ショーペンハウアーと1785年に結婚した。しかし1805年に難聴からくる鬱病に悩まされた夫は、ハンブルクの穀物倉庫から、運河に身投げして亡くなった。40歳だった彼女は、新たに、誰にも依存せず、誰にももう釈明する義務のない人生を望み、他の若い寡婦のように、伝統に従い、実母の元に保護を求めることなど考えられなかった。彼女はとうとう自由になり、商売の世界から離れ、自分が精神的に所属していると感じる人々、社交や芸術や他のすべての美しいものを感じる喜びをともにできる人々と生きたかった。

その後ヴァイマルに移り、サロンを開いた。親しい男性も何人かいたが、結婚はせず、それまでに夫とヨーロッパ各国を旅したので、時流に乗って旅日記を出版し、1810年頃から作家活動を始める。その中で最初の長編小説『ガブリエレ』（1819-20）の主人公ガブリエレには、しかし時

代精神に逆らわず、初恋を断念させ、愛していない男と結婚させる。作者の人生とは異なり、主人公は自らの運命に従い、諦念や従順により高い価値をおき、意味のないものに、あえて意味を見出そうと努力する。この点ではラ・ロッシュの作品の主人公たちとあまり変わらない。

ヨハンナは夫を亡くしてからは、莫大な遺産という金銭的な裏づけがあるがゆえに、自身は自由な生活ができたものの、読者に受け入れられるためには、自作の主人公たちの人生を世間の通念に合わせざるをえなかったのだろう。娘アデーレは未婚のままだった。

女性作家が、自ら理想とする生き方を実生活で貫けても、自作の主人公にそれを投影できるまでの道のりはまだ遠かった。



事務局より

2011年グラーツ大会情報

長尾会員の記事にもありますように、国際18世紀学会の第13回大会は2011年7月25日（月）から7月29日（土）まで、オーストリアのグラーツで開催されます。

大会関連のサイトがすでに開設されています（www.18thCenturyCongress-Graz2011.at）のでご覧ください。

なお、開催地の関係上、国際18世紀学会の2つの公用語（英語、仏語）のほか、今回はドイツ語でも発表できるようです。

日本からも多くの会員が参加されることを期待します。

国際18世紀学会の名簿について

前号ですすでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org>）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、その旨連絡してください。

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

国際学会へのメールアドレスの連絡は、来年に予定されている国際学会の執行委員の選挙に際しても特に重要です。来年の選挙は、メールでの投票と、郵便での投票の二通りの投票の仕方があり、グラーツ大会その場での投票はできません。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

以上ホームページ関係の連絡は、Pascal Bastien. admin@isecs.orgまで直接行なってください。
※日本18世紀学会事務局でチェックしたところ、誤ったデータ（すでに退会した会員のデータ、名前の誤表示など）が多数見つかりましたので、わかる範囲内で事務局で訂正いたしました。新入会員の方、連絡先等に変更のあった方はなるべく自分で上記アドレスに申告していただくか、ご自分のデータを更新してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（画面上部のISECS-Directというボタンをクリックすると名簿にアクセスできます。）

「『百科全書』研究会」からのお知らせ
別紙の案内をご覧ください。

特別展のご案内

名古屋大学附属図書館では、下記の要領で特別展が開催されることになりました。

テーマ： 水田文庫新収蔵記念「アダム・スミスと啓蒙思想の系譜」

期間： 2010年10月14日（木）～11月11日（木）（平日・土曜日のみ開場）

時間： 9:30～17:00

会場： 名古屋大学中央図書館展示室

内容： 水田洋会員の蔵書のうち、16世紀末から19世紀後半にいたる約700冊が「水田文庫」として、平成21年度末に名古屋大学附属図書館に収蔵された。今回の特別展ではそれを記念して、文庫の中から、アダム・スミスの『道徳感情論』、『国富論』、トマス・ホッブズの『リヴァイアサン』など、スコットランド啓蒙思想に連なるスミスの先駆者たちの著作や、ファーガソン、ヴォルテール、コンスタンなど、スミスの同時代人やスミスの影響を受けたイギリス内外の思想家たちの著作を中心に紹介する。

講演会： 水田洋、田中秀夫、篠原久の3氏による講演会（司会は安藤隆穂氏）が2010年10月30日（土）に開催されます。

詳細のお問い合わせは名古屋大学附属図書館まで。

なお、当学会も後援団体の1つとなっています。

寄贈図書

今年1月以降、下記の献本をいただきました。お礼申し上げます。

山辺恵造・美登里 『フランス百科全書と技術学 - 「もの造り」の名誉回復と大革命-』 けやき出版、2009、xi+199 p. （2010年1月受領）

日本ジョンソン協会 [編] 『十八世紀イギリス文学研究』 第4号、「交渉する文化と言語」、開拓社、2010、431 p. （2010年6月受領）

投書欄について

この「学会ニュース」に投書欄を設けることにしました。2つの欄を予定しています。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。

- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は9月末までに、4月号は1月末までに、9月号は6月末までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、ホームページ「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費の払い込み用紙を同封させていただきます。未納分のある方には、その年数に応じた金額を印字した用紙を送らせていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。なお、口座番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

寄付のお願い

別紙要領をご覧ください。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、井田尚、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久、笠原賢介、川島慶子、小穴晶子、関谷一彦(常任幹事、年報担当)、田邊玲子(常任幹事、年報担当)、寺田元一(国際学会執行委員)、長尾伸一(東アジア交流担当)、中山智子(常任幹事、総務・会計)、服部典之(常任幹事、年報担当)、堀田誠三、増田真(代表幹事)、吉田耕太郎(常任幹事、年報担当)

会計監査：中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第64号 2010年9月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>